日ロ交流

発行: 特定非営利活動法人日ロ交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page: http://www.nichiro.org
〒106-0041東京都港区麻布台3-4-14
麻布台マンション401号
Tel：03 (5563) 0626　Fax: 03 (5563) 0752

初めてのロシア語合宿

小嶋 大志

はじめまして。本年度より常任理事を務めます小嶋大志と申します。8月10日～11日の土日に開催されたロシア語合宿に初参加しましたので、その様子をレポートさせていただきます。

はじめに私とロシア語の関係ですが、約20年前からロシア語に興味を持ち、テキストやCDを使って2度ほど独学でチャレンジしましたが、仕事も日常生活もロシアとは全く関係がないこともあり、「これは本です」のあたりで挫折を繰り返してきました。今年は役員に名を連ねたこともあり、キリル文字と日常挨拶数種類しか知らない初心者であることを予めお伝えしたうえで、思い切って合宿に挑みました。

結果は、ロシア語レッスンと会員同士のお話しと二日目のアトラクションと、内容盛りだくさんで、たいへん意義深く素晴らしい旅行となりました。

さて、合宿の概略です。初日は8月10日(土)12時に、各自の交通手段で東海道線の函南（かんなみ）駅に、先生2名と生徒6名合計8名が集合。今回お世話になった宿、伊豆畑毛（はたけ）温泉・富士見館の迎えの車で、途中コンビニに寄りながら、会場に入ってチェックイン。2人1部屋に分かれてしばし休憩の後13：30から、スニトコ先生担当の中上級クラスと、ウラジーミル先生担当の初級クラスに、それぞれ生徒3名ずつが入り、4時間強のロシア語レッスン。初級レッスンでは合間合間にブレイクとして、先生が撮影した写真を見ながら、昔と今のロシアについてのお話しもありました。その後は18時から夕食。20時からの懇親会では、スニトコ先生ご持参のビーツのペーストなどを賞味しながら、ロシア語学習やロシアにちなんでいろんな話しを楽しみました。

二日目のメインは、宿と同じ函南町内にある「めんたいパーク伊豆」で、明太子製造ラインを見学しながらロシア語で観光ガイド体験をするという大イベント。7:30から朝食と荷物の片付けを済ませ、8:30から9:45まで前日と同じクラスで、実際の見学ルートの図を見ながら、想定されるロシア語での説明を教わる授業。10時にチェックアウトの後、宿の車でパークまで移動。1時間弱かけて全員で見学ルートを回りながら、個々の展示や作業見学場所で足を止めて、主には一番上級レベルの参加者の方がロシア語で説明を行った後に、先生方がそれに補足と解説を入れ、その他のメンバーも都度都度で「ここではこう言えば良いですか？」などど先生に質問をして答えをいただきながら、11時過ぎに無事終了。

と、書くと、二日間熱心に学び続けていたように思われるかもしれませんが、懇親会以外でも、ガイド体験では展示を読んで驚いたり笑ったり、それが終わったら明太子のファストフードやお土産の買い物を楽しんだりと、世間によくあるバスツアーのように和気あいあいの雰囲気でした。

合宿の幹事さん（中村常任理事）によれば、毎回の会場選定では、せっかく夏に集まるのだから海や山など自然とのふれ合いも楽しめるようにしたいと、工夫して頑張っておられるとか。きっと次回も、ロシア語習得という実利を兼ねた楽しい「大人の夏合宿」を企画いただけることと早くも期待しています。講師はお二方とも日本在留経験が長く、日本人へのロシア語教授のベテランであり、「ロシア語学習を始めたい・復活したい・深めたい」と思う会員各位にもっとたくさん参加いただければ、この合宿もますます盛り上がることと思います。拙いこの文章をお読みいただいた方が来年夏に、ロシア語上達と会員相互親睦の「一挙両得のお得な夏休み」を経験されますことを願ってやみません。　（常任理事）

お知らせ

●日本の家庭料理講習会（4）
日時：2024年10月27日（日）17：30～20：30
場所：田町「リーブラ」料理室

●ロシア語の泉（12）
日時：10月20日、11月10日、12月8日（日）13：30～16：00
場所：協会事務所又はオンライン
参加費：会員7,000円、一般8,500円
講師：スニトコ・タチヤナ先生

●交流バス旅行（予定）
日時：2024年11月30日（土）

●日向寺康雄さんを偲ぶ会
日時：2024年12月7日（土）13：00～15：30
場所：両国 ギャラリーX（カイ）
会費：2500円　＊10月末までにお申込みください。

●ロシア語教室生徒募集中！
レベル別クラスを経験豊富なロシア人教師が担当いたします。個人、オンラインレッスンもあり見学も1回可能です。
＊お問い合わせは事務局までお願いします。
Fax:03-5563-0752　E-Mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日ロ交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。なお、寄付とわかるようにお名前の前に番号「０１」と入れてください。山根一城氏にご協力いただきました。ありがとうございます。
振込先:郵便口座00160-9-66486、加入者：日ロ交流協会
連絡先:日ロ交流協会事務局E-Mail:nichiro@nichiro.org

イワン・クパーラ in 大森

安部 花子

7月13日、大森・東海ふ頭公園でのイワンクパーラに参加しました安部と申します。昨年に引き続き、今年も無事開催となりました。今回のロケーションは大森駅からバスで15分ほどの場所にある東海ふ頭公園。公園敷地の真上には首都高が通っていて、高架下に日陰になっている広場があり、目の前にはクルーズ船や物資運搬船が行き交う京浜運河が広がっています。大変気温の高い一日でしたが、堅牢なコンクリートの日陰と運河からのさわやかな潮風のおかげで、一人の急病者も出すことなく涼やかに過ごすことができました。

午前10時に場所取りに到着するものの、すでに広場には他の団体が2～3グループほど陣取っており、10名前後のスペースしか残されておらず途方に暮れていた私たちでしたが、そんな様子を見かねて、陣地を狭めてスペースの一部をさりげなく譲ってくれたり、なかなか火が起きないコンロにアツアツの炭を分けてくれたりと、別グループの方々がとても親切にして下さり、無事スペースを確保することができました。

今回は20名ほどの参加で、そのうち約半分が学生の皆さん！ファッションや歌の専門学校に通っている方、名古屋ウズベキスタン友好協会の方など、いろんなバックボーンをお持ちの方がたくさん参加されていました。いつものしっぽり大人のイワンクパーラとはうって変わって、わいわいと活気あふれる雰囲気です。岩橋さんのおろしたてコンロでお肉が焼きあがるのを待つ間も、各々が持ち寄ったいろんな楽器や衣装を使って、ロシアの歌や、コーカサス地方の舞踊、ミニゲームを楽しむことができました。その様子を横目に見ながら、「ああ、若い世代でもこんなに他国の文化に興味を持って、積極的に楽しもうとする人々がたくさんいるんだ…今は国際情勢が厳しくても、この方々が大人になった時には、もっと状況がよくなるに違いない。」と、ひとり感慨に浸りながらひたすらお肉を串に突き刺していました。これからも、国や所属の垣根を越えた交流を深める一助となるべく、誰でも参加しやすい開かれたイベントを続けられるよう協力していきたい、といっそう気持ちが新たになります。

お待ちかねのお肉が焼き上がり、みんなで頬張ります！毎度おなじみ、岩橋さんお手製の漬けダレに漬けた絶品シャシリク。毎年これを楽しみにイワンクパーラに参加するほど、私の大好物です。お皿に乗せてふるまうと、あまりの美味しさにあっという間になくなり、またすぐに次の串を焼いていきます。今回は豚肉が食べられない方のために鶏肉の用意もあり、多様性にも配慮したメニューとなっていました。

おなかが満たされたあとはイワンクパーラ恒例・交流ゲームを楽しみます。グループ対抗でじゃんけん勝負し、外国人チームが負けたら日本語の歌を、日本人チームが負けたらロシア語の歌を歌うという参加ハードルがえげつなく高いゲームでしたが、ロシア語の歌を一切歌えない私もなんとかじゃんけんに勝利し、歌の専門学校に通う外国人チームの美声にみんなで聞きほれました。今年も無事イワンクパーラを開催することができ運営の皆様に感謝申し上げます。

ウズベキスタン便り

フェルガナ州の学校改革3

後藤 三加子

フェルガナ州で日本の教育制度を取り入れた学校改革に取り組み始めて1年が経ちました。日本の公立小学校の教員としての経験をもとに、ウズベキスタンの学校教育に少しでも役に立つことができればと思い取り組んできました。その中で、日本の学校教育では当たり前のものが、外国では当たり前ではないものが数多くあることを知りました。そのいくつかをフェルガナでの取り組みとともに紹介します。

私がウズベキスタンの学校について驚いたことの１つに、職員室が無いことがあります。先生方は授業時間に合わせ出勤し、教室で授業をする。先生方が集まる場所や自分様の事務机はもちろん、個人情報の管理、教材作成用の資料や作成するための学校用のPCや機器等などが無いことには驚きました。休憩をしながら情報交換をする場所もありません。PCなどが活用されていない訳ではありません。しかし、その活用も含めて、個人に任されていることは驚き以外ありませんでした。教職員の人数の違いもあり、全員が集まる場所や機材等を揃えることは無理ですが、校内に教職員が常時使えるPCやプリンターなどを設置、くつろげる場所にもなる職員室を設置し活用してもらえるようにしました。

また、日本では各学校ごとに校内研究会や研修会、行政の区切りである市区町村や都道府県ごとに教科研究会や各種研修会等が実施され、教職員が生徒理解や指導、授業・教材について学んでいます。フェルガナ州では、州内の各地区１校ずつの代表校が学校内の施設や活動の様子を教育関係者に公開するとともに公開授業を実施しました。授業の見学後には、公開された授業や教材について協議会をもち、交流・意見交換する会を実施しました。

各学校はもちろん、同じ仕事をする上で先生方の経験や知識などが交流・共有されることにより各先生方の指導力・授業力の向上に役立っていけばと考え取り組んでいます。

（フェルガナ州　教育アドバイザー）

国際放送史研究の戯言No029

突撃隊員反対派放送

島田 顕

突撃隊員反対派放送は、第二次世界大戦中にソ連領内から発信されていた秘密放送の一つで、ドイツ国内で粛清された突撃隊を自称している。

突撃隊とはナチス党の戦闘部隊のことである。ナチス党発足以降、下部組織として積極的に活動を展開、ドイツ共産党戦闘部隊との武装闘争や、ユダヤ人の弾圧（商店にダビデの星を描き、不買運動を行うなど）を行い、ナチス党政権の樹立に貢献した。突撃隊は隊長であるエルンスト・レームによって率いられていたが、ナチス政権樹立以降、党内での主導権争いに敗れ、またドイツ国防軍との確執（突撃隊員を優遇措置により国防軍幹部に採用することを要求、国防軍側がこれを拒否）により、ヒトラーの命令によって粛清された。このときの粛清に積極的な役割を果たしたのが、ヒトラーが突撃隊とは別に創設した戦闘組織である親衛隊だった。

「突撃隊」もしくは「突撃隊反対派」を名乗っていることは、この放送がヒトラー政権に反対していることを意味している。ヒトラー政権に反旗を翻すものがいるということをアピール、ヒトラーに強烈に恨みを持つ者たちの名前を借りることによって、反体制運動への参加を呼びかけているのである。しかしながら、この放送に従事していたのは突撃隊の生き残りたちではなく、ドイツ人亡命者、のちにはドイツ人捕虜たちが従事していた。

結局、ドイツ語放送であったこと、ドイツ人民放送と同様の放送内容であったこと、情報ソースが同じだったこと、ターゲットグループがかなり限定的（主に突撃隊の残党たち）だったことから、秘密放送の中の一番組程度の価値しかなく、独自の放送を名乗る意義は小さかった。

送信出力は50キロワットと比較的大きかったものの、常に妨害電波にさらされ、頻繁に周波数を変えなければならず、そのためにドイツ国内での聴取率は低かった。だがヒトラー政権の注目度は高く、破壊すべき敵放送のリストに挙げ、妨害電波をかけるなどの措置が行われていた。

送信は、1941年9月24日までに開始、1944年末までに終了した。開始アナウンスは、「注意！こちらは突撃隊員反対派放送です！注意！突撃隊員ハンス・ウェーバーがあなたに話しかけます！」というものだった。また、「突撃隊員マックス・シュレーダーが話しかけます！」とも語ったようである。終了アナウンスでは、「こんにちは、こんにちは、ハンス・ウェーバーが突撃隊員反対派放送についてお話ししました！同志たちよ、あなたがたは、毎晩大体11時に38メーター・バンドで私のショーを聞くことでしょう。私の番組に注目するために、あなたがたが信頼できる同志たち、友人たちを作ってください。突撃隊員反対派に集まりましょう！革命的な突撃隊員の同志たちを組織してください！突撃隊員たちよ、目覚めよ！」と語られた。

開始当初は毎週月曜日、水曜日、土曜日の23時から23時30分まで、1942年初めからは、毎日午後11時から午後11時20分まで、1942年末からは、毎日20時と23時、そして翌日の12時に最後の放送の再放送があった。ドイツの防衛を混乱させるために、しばしば偽の暗号メッセージを読む放送の終わりに、方言色の強い言語（ベルリンおよびルール地域の方言）で、その日の大小の出来事に対しゆるい形で表現した。

突撃隊員反対派放送は、一言で表現するならば、「ソヴィエトの黒い放送」だった。国家と政党の汚職の事実を無慈悲な皮肉をもって取り上げ、穀物に対する武力、抑圧、補給物資の不足、祖国の堕落を糾弾した。これらのわかりやすい言葉で、リスナーたちを自分自身に結び付け、反対運動展開の組織結成を繰り返し呼びかけたのである。

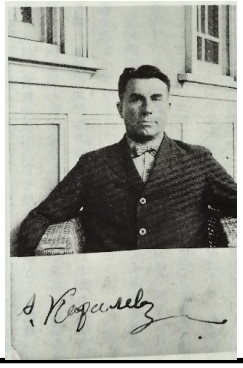
函館の露語講師カロリョフさんの85年前のメッセージ

倉田 有佳

去る9月7日と8日、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院ブンティロフ准教授が中心となり、「北海道におけるロシア語教育：歴史と現状」と題する研究会とワークショップが開かれた。１日目の研究会は、研究発表と実践報告から成っており、「北海道（函館）におけるロシア語教育の特徴―幕末開港期から20世紀前半まで」をテーマに報告した筆者以外の発表者11名は、高校や大学でロシア語教育の現場に立つ方々だった。

特に印象的だったのは、サヴィヌィフ・アンナさんの「コミュニカティブ・アプローチのロシア語教科書作成に向けて―学生の視点から見るトピック」だった。1970年代の文法の反復指導中心から、学習者のニーズに合わせたコミュニケーションで「意味」の伝達を重視し、学習したことを将来のコミュニケーションの中で応用可能にする教授法が「コミュニカティブ・アプローチ」だ。アンナさんが教鞭を執る複数の大学でロシア語学習初心者（1年生）を対象に会話したいトピックを調査・分析した結果は、「駅」「空港」「病気」など実用性の高いテーマが人気で、教科書で扱われてきた伝統的テーマと言える「家族」や「趣味」は、個人情報に関わることもあって学生の関心が低かった、というから面白い。「教科書には教師の「教えたい」と学習者の「勉強したい」のバランスが重要。教科書には時代に合わないテーマが多々見受けられるため、内容のアップデートが必要」、と締めくくられた。

露領（北洋）漁業が盛んなりし戦前の函館でのロシア語講座のことが想起された。1939年に亡くなるまでの7年間講師を務めたアルハンゲリスキーは、受講者の大半が漁場通訳だったこともあり、革命前漁業監督官だった経験を活かし、教材は現場で役立つ内容一辺倒だった。後任のカロリョフ氏（革命前は海軍少佐）【写真】は、ロシア文学など種々のテーマを希望する者がいたことを知り、漁場通訳にとって最も困難な場面は、漁場での作業中、漁業監督官が作成する調書に対する陳述書や証明書の作成だが、漁業問題ばかりのテーマでは「聴講生を倦怠疲労」させてしまうとして、ロシア語の新聞や新語を含む文芸作品等を教材に取り入れた。氏の根底にあったのは、漁場の現場で「必要な最小限度の露語に通暁し、それをより深く研究するには、ロシヤ文学に含蓄される大なる文化的価値と、その大なる社会過程とを正確に理解することが必要」、との考えだ（ア・ニ・カラリョフ（高瀬生訳）「將來の露語研究（北洋同志会露語講習会閉会式に於ける演説）」『北洋』第11号、1940年）。講義は1939年11月から翌年3月末までのわずか15回で終了となるが、85年前のカロリョフさんの露語講師としての基本姿勢は、今日に至るロシア語教育者へのメッセージでもある。



出典：大野吉雄「二つの祖国・カロリョフさんのこと」『地域史研究はこだて』第16号1992年

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

1986年日本産業総合展

畔上 明

30代前半ソ連関係の仕事から離れ試行錯誤を重ねていた折、ロシア語要員を募集している会社があると紹介されたのが、丁度ゴルバチョフ書記長がペレストロイカ政策を打ち出した1986年の春でした。

神戸に本社を構える「丸永梱包」という会社が東京支店の中に「国際営業部」という部門を設け、吉川常務とK係長という二人のスタッフでソ連向け輸出プラントを梱包するという営業開拓をしていた職場です。火付け役は、大学の先輩でフリーランスでの通訳を行っている古野武昭さん、「ソユーズヴネシトランス(ソ連対外輸送公団)」と「丸永梱包」との関係を築き上げ、公団指定代理店としてのお墨付きを得ていたのでした。日本の機械製造工場(プラント)をパーツごとに分けて幾つもの木箱に収納して送り出す、その梱包仕様をソ連のゴスト規格を周知した丸永の各工場が対応するというのが会社の売りでした。

私の役割は、品川の通商代表部を定期的に訪れては「ヴネシトランス」のディヤチェンコ部長と面談し、プラント需要の案件のある輸入公団の担当者を紹介してもらうこと。そしてその公団担当者と打合せを行い、大手から中小に至るまでの各商社のソ連向け機械輸出担当者や、様々なメーカーのソ連担当者と面談を重ねていくことでした。月に一度は神戸本社を訪れ、各工場や営業所のスタッフと会議の場を持ちましたが、士農工商梱包屋、そして商社/メーカー/梱包屋と卑下しながらも、誰もが梱包の仕事に対して自負と誇りを持っていることが感じられたものです。

吉川常務やKくんと共にモスクワへ、或いは合弁事業を模索して、サンクト・ペテルブルクへと出張することもしばしばありました。

ソ連東欧貿易会の池田正弘(1951-2013)氏と親しくなったことから、1986年10月15日から26日までモスクワのエキスポセンターで開催の「日本産業総合展」の事務局に加わらせてもらう機会を得たことは、今でも深くその思い出が心に刻まれています。400社以上の日本企業が出展し、ソニーのウォークマン、パナソニックの小型テレビ、東芝やサンヨーのラジカセ、シャープのCDプレーヤーなど現在では骨董品扱いにされかねない品々ですが当時は貴重な目新しい製品として多くのロシア人の関心を得たのでした。展示会場前のクラースナヤ・プレースニャ通りには長蛇の列、開館時には押すな押すなの人の群れ、館内を駆け込んできた大男に足を踏まれた私は、左足の小指が化膿し、期間中は堪えていたものの帰国後悪化、小指の骨が割れて脇にもう一本の指が生えてくる始末。靴も履けなくなったため変形した6本目の指を手術したのでした。また、会場でおにぎりを販売していたオリガさんに一目惚れしたKくんはその後何度かモスクワに通い国際結婚に漕ぎ着けたこと。トランスメディアの「マルナガ」と会社名をカタカナ名に変更した梱包会社は、重厚長大のプラント輸出からハイテクへと移り変わる時代の波に乗り切れず東京の国際営業部は解体、仕事仲間は分れ分れとなりました。神戸からやって来ては酒を酌み交わすのみとなってしまった吉川氏でしたが、時の流れと共にあの世へと旅立たれたのでした。

遠いロシア再訪

浜野 道博

昨年に続き今夏もモスクワで過ごした。外務省の国・地域別危険情報はモスクワをふくむロシアの大半の地域をレベル3（「渡航中止勧告」）としておりロシアは気軽に行けない国になってしまった。日本との直行便がなくなって久しく今は中国や中東など第三国を経由しないとロシアにはたどり着けない。大使館や総領事館関係者を除く在留邦人の数は極小になっている。

それでも日露の交流は細々とつながっており国際交流基金や日本センターの日本語講座は受講希望者が多い。日本への公費留学生も受け入れているし時折日本文化のイベントも実施していて、日ロ間の絆を断ち切ることなく維持したいという日本政府の意向が見える。

そういう大使館に行くと領事部の前に日本の入国査証申請のため長蛇の列ができており、今年の訪日ロシア人観光客は過去最多になる見込みという。モスクワ以外の各地の総領事館でも毎日数十名に査証を発給しているらしい。

日本円が安くなり日本観光が手に届くようになったのかもしれないが、ヨーロッパ諸国が軒並みロシア人観光客を受け入れていない反動はあきらかにある。中国の航空会社各社がロシア各地と北京、上海などを空路で結び日本へのアクセスが容易になったことも預かったのだろうロシアでは日本観光ブームがにわかに盛り上がっている。

ながらく日ロの人的交流の源は日本＞ロシアであったが、今は日本＜ロシアで大逆転している。完全に非対称になったこの風景をどう見ればよいのか残念としか言いようがない。やはり戦争は止めねばならない。

「非対称」で思い出したが、8月10－11日モスクワ市内で「ISEKAI2024」と称するイベントがあって呼ばれて行ってみた。「伊勢会」とは何かはじめ見当がつかなったがどうやら「異世界」らしいと分かった。2日間でビジターが約9000人という規模の日本のコスプレイベントであった。会場は立派なモスフィルム会館の一角で多数の若者があつまり、屋台がでたり、各種グッズを販売したり賑わっていた。一般入場券が2100ルーブル（約3200円）なので、単純に計算しても2日間で3000万円近い売上になりちょっとしたビジネスである。

モスクワで日本文化イベントと言えばコロナまではJ-FestやHINODEなどがメジャーで毎年多数のモスクワ市民を集めていたが、コロナと戦争で中止の憂き目にあったまま今日に至っている。HINODEが再開にむけて作業中とは聞いたが、想像を絶する困難があろうと思う。その点「ISEKAI2024」はモスクワ地元の資源を総動員してのロシア人主催のコスプレ大会で、日本人が多少違和感をもっても、ロシア人は平気なものであっけらかんと楽しんでいた。3200円の入場料だってそう簡単に庶民の手に届くような値段とは思えないが、この程度の出費はへっちゃらというモスクワっ子も多数いるという話を次回紹介したい。